

C1:男子体操競技

男子審判長 森 直樹

令和7年度全国高等学校総合体育大会体操競技大会が2025年8月3日から8月5日まで福岡県北九州市の北九州市立総合体育館において開催されました。この会場は浜田市出身の体操選手でありローマオリンピック男子団体金メダリストである竹本正男氏の功績を称えて「竹本正男アリーナ」と名付けられた、体操の聖地となっている場所です。そのような会場で高校生の全国大会が開催されることを審判員として大変喜ばしく思っています。

監督会議では適用規則の確認や、マナー面での注意事項について説明しました。適用規則は2025年版高等学校男子適用規則であり、ここに記載のないものはすべて2025年版採点規則（一般規則）であること、3回宙返り技および鉄棒における手放し技を実施する際に競技用追加マットの設置が認められることを説明しました。また、マナー面においては、体操競技情報32号の記載内容でもある、器械の準備は3名までであることと、前の選手の演技終了を待たずにマットに上がって準備をするといったことがないように注意していただくことを再確認させていただきました。また、Dスコアに対する問合せは、例年通りD1審判に直接行い、意見の相違があった場合に限り審判長に問い合わせることができること、問合せはDスコアの他にもニュートラルディダクションや着地加点についても認めることも合わせて伝えました。

審判会議および審判研修においては、高等学校適用規則の内容を全体で共有し、理解を深めました。全体的な場で各種目のD1審判によって採点指針についての解説をした後に、種目ごとに分かれて、出場する全ての選手を公平公正に採点すべく、今大会における採点の方向性や減点内容について共通理解を図りました。

競技会においては、予選と決勝を通して、演技とその得点を見つめる限り、一都道府県や一所属に偏った採点が行われていたり、競技の日程や時間によって得点の基準が変わったりするなどといった問題はなく、全ての審判員が一貫して公平公正に採点することができていたと感じました。演技内容を見てみると、静止技における静止時間の不足が多くみられたことがとても気になりました。これについては毎年報告書を通して伝えてはいるものの、情報が浸透しておらず、残念ながら今大会においても多くの選手が静止技における静止時間への意識が薄いと感じました。特に平行棒における脚前挙からの伸腕屈身力倒立（伸肘倒立）や後ろ振り倒立、つり輪における脚前挙や倒立の際の静止時間の不足が多く見受けられ、技の不認定や大欠点を被るかたちとなってしまいました。今一度日々の練習の中で静止に関する意識を高めていただきたいと思います。また、特筆すべき点では、着地に対する意識が高まったことです。新しい規則から「着地加点」が導入された影響からか、着地を止める選手が増えました。これまでの高校適用規則でも着地を止めた場合はE審判による0.1の加点がなされていましたが、加点が目に見える形で表されるようになった影響で更に意識が高まったように思い、大変喜ばしく思いました。

Dスコアに対する問合せは6種目を通して予選で17件、決勝で3件ありましたが、姿勢不良や角度逸脱によって難度が不認定となったケースがほとんどであり、D1審判の説明においてご納得いただきました。審判長への問合せ（インクワイアリー）は全日程を通して2件あり、1件は得点の変更がありました。

監督会議にて説明させていただいたマナー・モラル面においては、全体的によく守られていると感じました。今大会は、競技中に種目の周辺に霧吹きや雑巾などが散乱していることはなく、会場全体をできる限りきれいに使おうとする意識を持つ選手が増えたように感じました。

最後になりますが、大会実行委員会、高体連関係役員、島根県体操協会や補助役員、その他大会に携わりました多くの皆さまのお陰により素晴らしい大会となりましたこと、心より感謝申し上げます。

1. 審判研修会での確認事項

- ・2025 年版採点規則、2025 年版高等学校男子適用規則の確認
- ・雄大なアクロバットの跳躍技において、先取りのある頭や腰の位置の高い着地を評価する。
- ・宙返りひねり技でのゆがみのない正確な実施を評価する。
- ・グループⅠの旋回技や力静止技、柔軟技において丁寧に美しさを表現する捌きを評価する。
- ・静止時間不足やアクロバット技の前の2秒以上の停止を厳密に採点する。

2. 採点上起こった事項とその対応

■技の認定について

- ・宙返り技において腰まがりや膝まがりの度合いによって、伸身・屈身・かかえ込み姿勢を判定した。
- ・宙返りひねり技において要求されている正しい向きから 90°を超えてひねりが不足した場合、ひねり度数の少ない技として判定した。
- ・静止技において静止の見られない実施は不認定とした。

■E スコアについて

- ・雄大で高さのある高難度の宙返り技で着地準備の見られる高い着地姿勢の実施を評価した。
- ・宙返りひねり技でのひねり不足やゆがみのみられた実施において相応の減点をした。
- ・静止技において、正しい姿勢からの逸脱や静止時間を厳密に判定した。
- ・アクロバット技の前の停止時間を厳密に判定した。

3. その他の特記事項および所感

2回宙返り技の実施

	【予 選】249 演技	【決 勝】85 演技
① 実施数	189／249 名 (75.90%)	84／85 名 (98.82%)
② 前方	117／189 名 (46.98%)	69／84 名 (81.17%)
後方	162／189 名 (65.06%)	81／84 名 (95.29%)
前方と後方 (実施数との比較)	98／189 名 (51.85%)	64／84 名 (76.19%)
③ 3 技 (実施数との比較)	16／189 名 (8.47%)	14／84 名 (16.67%)
④ 組合せ加点 (実施数との比較)	7／189 名 (3.70%)	4／84 名 (4.76%)
⑤ 終末技での実施 (実施数との比較)	59／189 名 (31.22%)	49／84 名 (58.33%)

着地点

	【予 選】249 演技	【決 勝】85 演技
① 加点数	75／249 名 (30.12%)	17／85 名 (20.00%)
② 2回宙返り (加点数との比較)	14／75 名 (18.67%)	3／17 名 (17.65%)

2025 年版採点規則において、ゆかでは終末技に2回宙返り技の実施が求められているが、高校適用規則においては、演技内に2回宙返り技の実施が求められている。2回宙返り技は、予選で189名(76%)、決勝で84名(9%)と非常に多くの選手の実施が見られた。その中でグループⅡ/Ⅲを両方おこなった選手は、予選で98名(52%)、決勝で64名(76%)と大変多く、D スコアを高めるためにトレーニングを積んできたことが伺えた。終末技での2回宙返り技の実施は、予選で59演技(31%)、決勝で49演技(58%)と多くの選手が採点規則への対応を意識した取り組みを見せた。また、柔軟性が表現された姿勢で2秒静止する片足平均立ちにおいては、柔軟性の欠如や静止時間不足等の実施減点を伴う実施が散見された。

ゆかは難度の高低に関わらず、1つの宙返り技で多くの減点ポイント(高さ・脚の開き・姿勢・ひねり不足・着地準備・着地姿勢など)がある。高いE スコアを獲得するためには、宙返りひねり技での正確な実施や、着地を止めることはもちろん、着地を止めた場合においても着地準備の見られる、頭や腰の位置の高い着地姿勢が必要となってくる。「ゆか」は着地をする回数が多い種目であることから、高いE スコアを獲得するために終末技はもちろんのこと、全てのアクロバット技において安定した着地を心がけた取り組みを期待したい。

1 採点上の打ち合わせ事項

- ・片足振動倒立技、旋回倒立技、縦向き旋回の向き、旋回で腰がまがる、腰の伸びがない旋回に関する減点の確認。
- ・片足振動において、足先が高く、大きく開脚した雄大な演技を評価する。
- ・腰高で体線が美しく、スピードある旋回で実施された演技を評価する。
- ・縦向きでの旋回技において、明確な向きで実施された演技を評価する。

2 採点上起こった事項とその処理

■技の認定について

- ・片足振動技において、支持姿勢の前に脚部が馬体に乗る実施は不認定とした。
- ・今大会において、倒立下りが不認定と判断された実施は次のとおりである。
 - (1) 倒立位の逸脱が 45° を超えた実施
 - (2) 振動を全く利用せず、完全に力の使用で実施した実施
 - (3) 足先が 45° 以上下がった実施
- ・旋回倒立後に3部分移動や 360° 以上のひねりを行う終末技において、馬体を越えることができなかったり、最後の支持手に重心が乗っていなかったりした実施は成立部分までを認定した。なお、完全にコントロールを失って転倒した実施は不認定とした。
- ・縦向き前移動(3/3部分)において、移動完了時の馬端外向き背面支持からただちに $1/4$ 転向した技について、縦向き前移動(2/3部分)のB難度で認定した。
- ・終末技のやり直しにおいて、終末技以外の技を実施した場合、それらの技は不認定とした。

■Eスコアについて

- ・片足振動技において、技以外の部分でも足先の高さが低ければ0.1または0.3の減点を行った。
- ・縦向き3部分移動技の角度逸脱の減点は、両手を着く位置のずれを見て、移動の際の最も大きい逸脱部分の減点をした。
- ・倒立技においては、倒立位になるまでの力の使用、膝まがり、足先のまがり、倒立の角度、着地の向き等、各々減点をした。
- ・実施において、旋回で腰の伸びが見られないものは技ごとに0.1の減点を行い、腰をまげて技を実施する場合は各々0.1または0.3の減点をした。

3 その他特記事項・意見・感想等

予選 【 257 演技 】 ※0点は除く		決勝 【 85 演技 】 ※0点は除く	
Dスコア 最高	5.2	Dスコア 最高	5.2
Eスコア 最高(6技以上)	8.850	Eスコア 最高(6技以上)	9.000
平均得点(落下・技数ND演技除く)	10.935	平均得点(落下・技数ND演技除く)	11.927
Dスコア平均(落下・技数ND演技除く)	3.136	Dスコア平均(落下・技数ND演技除く)	3.931
Eスコア平均(落下・技数ND演技除く)	7.799	Eスコア平均(落下・技数ND演技除く)	7.996
落下演技数	81 演技	落下演技数	14 演技
グループ点数0.5獲得演技(Ⅱについて)	79 演技	グループ点数0.5獲得演技(Ⅱについて)	49 演技
グループ点数0.5獲得演技(Ⅲについて)	110 演技	グループ点数0.5獲得演技(Ⅲについて)	74 演技
グループ点数0.5獲得演技(Ⅱ・Ⅲ両方)	66 演技	グループ点数0.5獲得演技(Ⅱ・Ⅲ両方)	47 演技

あん馬は旋回の質が得点を左右する。縦向き旋回における向き(角度)については減点基準が明確化され、多くの選手がその課題に取り組み改善されたように感じた。一方、旋回において腰の伸びが見られない、あるいは、腰をまげる減点については、多くの選手が抵触し減点が嵩んだ印象である。演技の始めは十分体線の美しさを示す演技も、高難度の技の実施や演技後半になるとこれらの減点を受けてしまう演技が多かった。また、終末技において倒立下りを実施するも不認定や意図した難度を獲得できないケースも多く、得点を下げる選手も多くいた。次年度は終始、体線の美しさとスピードを兼ね備え、終末技まで熟練した実施が多く見られることを期待したい。

2025年版採点規則では、グループⅡ・Ⅲの技はD難度以上の技を実施し認定されれば0.5のグループ得点が認められる。予選においては、グループⅡ・Ⅲの技をどちらか一方または両方組み入れた演技構成の全てで50%を下回っているが、決勝においてはすべて50%を超えている状況であった。

1 採点上の打ち合わせ事項

- ・2025年版高等学校男子適用規則の確認。
- ・演技全体として美しさと強さを表現した演技を評価する。
- ・倒立や静止技で正確な姿勢と静止時間を評価する。
- ・安定感のある演技を評価する。
- ・倒立位や支持で腕がケーブルに触れる、肘や腰を使って調整する減点について
- ・難度表にない姿勢での2秒以上の静止は減点の対象。

2 採点上起こった事項とその処理

■技の認定について

- ・静止技や力技で静止時間不足の実施は減点、静止が見られない実施は不認定とした。
- ・後方（前方）車輪倒立（2秒）において腰が45°を超えてまがった実施は不認定とした。
- ・け上がり支持において支持局面で肘が深くまがる実施は不認定とした。
- ・ホンマ十字懸垂において、ホンマの腕の角度が高い実施は十字懸垂のC難度のみを認定した。
- ・中水平支持で肩の位置が高い実施は上水平支持として判定した。

■Eスコアについて

- ・力倒立においてケーブルへの接触や姿勢不良が多く見られた。
- ・振動倒立技において減点がない実施はほとんど見られなかった。
- ・力技における角度の逸脱は相応の減点をした。
- ・脚前拳支持や倒立における静止時間の不足が多く見られた。
- ・肘のまがりを求められていない技、とくに十字懸垂での肘のまがりが多く見られた。

3 その他特記事項・意見・感想等

今年度より高校適用規則が変更となり、加点はE難度以上のグループⅡ/Ⅲの技に対し0.10となった。加点のあった演技は、予選252名中5名、決勝85名中5名であり両日とも2つ以上のE難度以上グループⅡ/Ⅲの技を演技構成に取り入れている選手は1名であった。昨年はE難度の力技を構成した演技は7名であったのに対して大幅に減少しており、積極的に取り組んで欲しいと感じた。また、ルール変更に伴い着地に対する意識が変わっていることを感じた。C難度以上の技で着地を止め着地加点を獲得した演技は、予選で54名、決勝で26名であった。

全体を通して、ルール変更に伴いグループⅡ/ⅢのD難度以上の力技に取り組む実施が多く、とくにグループⅢの技ではホンマ十字懸垂の実施が多かったが、認定に関して悩む演技も多く見られた。ホンマ十字懸垂として認定できたとしても減点の多い実施がほとんどで来年以降の強化を期待したい。グループⅡのD難度以上の技としては、中水平やアザリアンの実施が多く、とくに中水平に関しては肩の位置が高く上水平と認定したり、姿勢が悪く多くの減点を含んだりする実施が見られた。また、十字倒立の難度が格上げされたことにより構成に取り入れる演技が見られたが、肩の位置が高く減点の多い実施がほとんどであった。こちらも来年以降の実施に期待をしたい。また、今年も力倒立や振動倒立に持ち込む際のケーブルへの接触や倒立の弱さを感じる演技が多く見られた。A難度の後ろ振り上がり支持においても支持をする際に腕をまげケーブルに触れてしまうような捌きが多く、ケーブルに触れてしまうと0.30の減点となることから、そのような捌きの演技は高難度の終末技で着地を止めたとしてもEスコアが出にくい結果となった。また脚前拳などの簡単な力技・静止技においても2秒の静止が求められているが、静止時間不足で0.30の減点をされてしまう演技がいくつもあった。普段の練習からしっかりと意識をして取り組んでもらいたい。

演技開始前のアップ時間の長さについては、昨年と同様で時間を超えるチームが多かった。整列時に注意喚起を行うと大幅に時間を超えるチームが少なくなった。ということはそのことについての意識がされていなかったということだと思う。来年以降の意識の変化に期待したい。

1. 採点上の打ち合わせ事項

- ・2025 年版採点規則、2025 年版高等学校男子適用規則の確認
- ・雄大な跳越、および着地準備局面を示し、腰が高い位置での着地を評価する。
- ・第一局面、着手、第二局面、着地の減点の確認

2. 採点上起こった事項とその処理

■技の認定について

- ・伸身ツカハラにおいて腰が 45°を超えてまがった実施は屈身ツカハラとして判定した。
- ・90°を超えるひねり不足が見られた実施は一段階低い価値の技と判定した。

■E スコアについて、以下の実施に留意して減点をした

- ・第一局面での脚の開き ・着手の際の倒立姿勢 ・第二局面での姿勢、膝、つま先の減点
- ・着地までの準備局面、着地姿勢、ひねり不足 ・着地

3. その他特記事項・意見・感想等

①競技結果

優勝：ヨネクラ（D5.6）を実施した選手で、得点は 14.550（E9.050、ND0.1）。高校生でこの技を安定して実施できる技術力は特筆すべきものであり、全日本クラスに匹敵する素晴らしい演技だった。

2 位：ロペス（D5.2）で、得点は 14.100 点（E9.000、ND0.1）。

3 位：ドリッグス（D4.8）で、着地をまとめた選手が 2 名おり、同点で 14.050 点（E9.250）だった。

②決勝出場者 85 名における跳越技の分布

D スコア	実施数	跳越技と実施数
5.6	1 名	ヨネクラ（1 名）
5.2	2 名	ロペス（2 名）
4.8	24 名	ドリッグス（21 名） ローチェ（2 名） シューフェルト（1 名）
4.4	37 名	伸身ユルチェンコ 2 回ひねり（4 名） ロウ・ユン（1 名） アカピアン（32 名）
4.0	9 名	伸身ユルチェンコ 3/2 ひねり（1 名） 伸身カサマツひねり（8 名）
3.6	10 名	伸身ユルチェンコ 1 回ひねり（1 名） 伸身カサマツ（9 名）
2.8	2 名	伸身ツカハラ（2 名）

③着地について

着地が止まった実施は、予選で 16 名、決勝では 3 名だった。

予選での内訳：屈身ツカハラ 1 名、伸身ツカハラ 2 名、伸身ユルチェンコ 1 名、伸身カサマツ 6 名、伸身カサマツひねり 1 名、アカピアン 2 名、伸身ユルチェンコ 2 回ひねり 1 名、ドリッグス 2 名。

決勝での内訳：伸身カサマツ 2 名、アカピアン 1 名。

D スコアが高い技でも着地を止める選手が多く、全体的に着地への意識が高まっていることが確認できた。一方、着地姿勢が低かったり、横に大きく乱れたりした演技は、D スコアが高くても E スコアが伸び悩む傾向にあった。跳馬は着地の印象が採点に大きく影響する種目であるため、D スコアを追求するだけでなく、安定した着地姿勢を維持する練習も重要であることを改めて感じた。

④跳躍中の姿勢に関して

ツカハラ系の跳躍では、第一局面での脚開きが見られる実施が散見された。しかし、D スコア 4.4 以上の技では、脚が揃った美しい実施もあり、減点を極力抑えようという選手の高い意識がうかがえた。一方で、一部の選手では脚が大きく開き（0.5 点相当の減点）、着地がまとまっても E スコアが伸びない演技も見られた。ツカハラ系の技に取り組む選手は、跳躍中の姿勢、特に第一局面での脚閉じを意識した練習を心がけてほしいと感じた。

⑤マナーについて

跳馬を直接濡らす行為や助走路でのアップ等をする選手はいなかった。挨拶についても大きな声で挨拶が行われており、マナー・モラルの面では、素晴らしい対応であったと感じた。指導者の方々に感謝し報告とする。

1. 採点上打ち合わせた事項

- ・2025 年版高等学校男子適用規則の確認
- ・評価すべき演技の確認

肘をのばした美しい倒立姿勢を表現した演技や、雄大な終末技かつ腰高で安定した着地を評価する。

■技の認定について

- ・静止技において静止がみられない実施は不認定となる。
- ・ディアミドフなどの倒立で完了する技について、腕を伸ばして明確な倒立姿勢を示さない場合は不認定とする。

■E スコアについて

- ・後ろ振り上がり倒立から支持・腕支持・懸垂に振り下ろした場合 0.3 の減点とする。
- ・前振り上がりにおいて、背中が水平より低い実施は減点とする。
- ・終末局面が倒立位の技における角度逸脱に対しては、相応の減点を行う。
- ・後ろ振り倒立において、力を使ったり、腰をまげて倒立に持ち込んだりした場合、相応の減点を行う。
- ・静止技における静止時間の不足については厳密に判定する。
- ・終末技の着地姿勢(高さ)について、頭や腰の位置が高い実施を評価する。

2. 採点上起こった事項とその処理

- ・「ディアミドフ」「前振りひねり倒立」「棒下宙返り倒立」「後方車輪倒立」において、倒立姿勢を示さずに肘をまげて直接前振り上がりに持ち込んだ実施は不認定とした。
- ・「ティップルト」「単棒横向き開脚浮腰上がり支持経過倒立」において、脚がバーの上に乗った実施は不認定とした。

3. その他特記事項・意見・感想等

2025 年版採点規則からほとんどの技で難度が上がった 2 回宙返りから腕支持になる技について「モリスエ」1 名、「ベール」1 名が実施をした。まだ演技に取り入れている選手は少ないが、積極的に取り組んでもらいたい。

後ろ振り倒立から支持等へ振り下ろした選手は 5 名で、ほとんどの選手は「(後ろ振り)倒立ひねり」を行うことで 0.30 の減点を回避していたが、その実施について、手ずらし等の減点を伴う演技が散見された。今後の強化に期待したい。

今年から導入された着地加点について、予選 22 演技/252 演技 (約 8.7%)、決勝 16 演技/85 演技 (約 18.8%) に 0.10 の加点をした。

昨年同様、静止技に課題があった。「脚前挙支持(2 秒)」と「伸腕屈身力倒立(2 秒)」について、静止時間が 2 秒に満たない実施が非常に多くみられた。すべての静止技は、静止時間が 2 秒に満たない場合は 0.30 の減点であり、静止が見られない場合は 0.50 の減点であるため、E スコアに多大なる影響を与える。今後、各校で通し練習をする際、すべての静止技における静止時間を計測し、確実に 2 秒以上静止しているか必ず確認をしてほしい。

また、「ディアミドフ」や「棒下宙返り倒立」といった倒立で完了する技においては、腕を伸ばした倒立局面を表現しないと不認定となる可能性があるため、コントロールされずに腕支持などに持ち込む実施にならないよう、日々の練習から意識をしてほしい。

1. 採点上打ち合わせた事項

- ・2025 年版採点規則、2025 年版高等学校男子適用規則の確認
- ・理想の演技、高く評価する演技の確認。
 - 雄大な手放し技（高さ、再びバーをつかむ前に体の伸ばしがあるもの）
 - 準備局面を有し、意識的に止められる終末技
 - ひねりや倒立位において角度逸脱の少ない、膝やつま先まで伸ばした美しい演技
- ・演技開始時の 3 回を超える振り出しについての減点。
- ・演技開始時に、後ろ振り上がり支持から後方浮支持回転を実施した場合の減点。
- ・力を使う実施についての減点（チェコ式車輪・エンドー・け上がり倒立）。
- ・余分な手の握り換えについての減点。

2. 採点上起こった事項とその処理

■技の認定について

- ・ヤマワキにおいて、明らかな腰まがりの見られた実施や、伸身姿勢の表現が乏しい実施は B 難度（ボローニンもしくは後ろ振り上がり上向きとび越し懸垂）として判定した。
- ・伸身トカチェフにおいて、明らかな腰まがりが見られた実施は、屈身トカチェフ（C 難度）として判定した。
- ・肩を半転位した状態での逆手背面車輪は大逆手車輪（B 難度）として判定した。
- ・後方伸身 2 回宙返り 1 回ひねり下りにおいて、全経過大きく腰のまがりが見られた実施は後方屈身 2 回宙返り 1 回ひねり下り（C 難度）として判定した。

■E スコアについて

以下の実施において厳密な実施減点をおこなった。

- ・手放し技において、バーを握る前に身体の伸ばしが不十分な捌きや、膝のまがった実施、身体が歪んだまま懸垂になる実施。
- ・手放し技でバーをつかむ際や後の車輪における肘まがり、姿勢不良。
- ・手放し技や終末技の前の車輪の膝まがり。
- ・け上がりやエンドーで力を使用したり停滞したりする実施。

3. その他特記事項・意見・感想等

D スコアについて、今大会で実施された手放し技の種類は、上向きとび越し・ボローニン・ヤマワキ・開脚トカチェフ・屈身トカチェフ・伸身トカチェフ・リュースキン・ギンガー・屈身イエーガー・伸身イエーガー・ウィングラー・コバチ・コールマン・カッシーナであった。特にギンガーを取り入れた演技の増加が顕著で、予選決勝を合わせて 29 演技あった。組合せ加点は開脚トカチェフ＋ギンガーで 0.1 の加点を獲得した演技が 1 例あり、今大会唯一の組合せ加点であった。C 難度以上の終末技を実施し、着地が止まった判定をした演技は予選 249 演技中 47 演技（18.9%）、決勝 85 演技中 32 演技（約 37.6%）であった。特に決勝では非常に高い着地への意識を感じた。

E スコアについて、今サイクルから 8 技までの認定となり、前サイクルよりも短い演技で高い E スコアを狙うような実施も見られた。しかし、技の前後の車輪で肘や膝、つま先がまがったり、エンドー、シュタルダー、アドラーなどで膝やつま先のまがりのある実施、器械に触れたり、ぶつかったりするといった実施は E スコアが伸びなかった。今年から多く使用されるようになったギンガーは宙返りの高さ不足やキャッチ時の肘まがり、脚開きなどの減点が目立った。しかしながら、ダイナミックで演技面からの逸脱もほとんどない素晴らしいものも見られ、高い評価につながっていた。これから新しい技を取り入れる選手も多くいると考えられるが、技をしっかりと解釈し、理想的な表現ができるように日々の練習、トレーニングをしていくと欲しいと感じた。